

まざいをおこなはんこと、よくくゝゑいりよをめぐらせ給べきかと、はゞかるところもなく、申されけり、一ゐん鳥羽後〇げにもぞや、おぼしめしけん、まざいをなだめらる、さてこそ、かまくらにもつたへうけたまはりて、このゑのにうだう殿とく大じのうだいじん殿、りやうまよをば、かたじけなきことに申されけれ、

〔吾妻鏡 二十五〕承久三年七月十二日甲午、按察卿光親〇於加古坂、梟之訖、年四十六云云、此卿爲無

雙寵臣、又家門貫首宏才優長也、今度次第殊成兢々、戰々思、頻有達君於正慮之處、諫議之趣、背叡慮

之間、雖進退惟谷、書下追討宣旨、忠臣法諫而隨之、謂歟、其諷諫申狀數十通、殘留仙洞、後日披露之時、

武州北條〇泰時後悔惱丹府云云、

〔太平記 十三〕龍馬進奏事

佐々木鹽治判官高貞ガ許ヨリ、龍馬也トテ、月毛ナル馬ノ三寸計ナルヲ引進ス、中略賀シ申サヌ

人ハ無リケリ、暫有テ、萬里小路ノ中納言藤房卿被參、座定マテ後、主上醍醐後〇又藤房卿ニ向テ、天馬

ノ遠ヨリ來レル事吉凶ノ間、諸臣ノ勸例、已ニ皆先畢ヌ、藤房ハ如何思ヘルゾト、勅問有ケレバ、藤

房卿被申ケルハ、天馬ノ本朝ニ來レル事、古今未ダ其例ヲ承候ハ子バ、善惡吉凶勸ヘ申難シトイ

ヘドモ、退テ愚案ヲ回スニ、是不可有吉事、中略元弘大亂ノ始、天下ノ士卒舉テ、官軍ニ屬セシ事、更

ニ無他、只一戰ノ利ヲ以テ、勳功ノ賞ニ預ラント思ヘル故也、サレバ世靜謐ノ後、忠ヲ立賞ヲ望ム

輩、幾千萬ト云數ヲ知ズ、然共公家被官ノ外ハ、未恩賞ヲ賜リタル者アラザルニ、申狀ヲ捨テ、詔ヲ

止タルハ、忠功ノ不立ヲ恨ミ、政道ノ不正ヲサ漏シテ、皆己ガ本國ニ歸ル者也、諫臣是ニ驚テ、雍齒ガ

功ヲ先トシテ、諸卒ノ恨ヲ散ズベキニ、先大内裏造營可有トテ、諸國ノ地頭ニ、二十分一ノ得分ヲ

割分テ被召レバ、兵革ノ弊ノ上ニ、此功課ヲ悲メリ、又國々ニハ、守護威ヲ失ヒ、國司權ヲ重クス、依

之非職、凡卑ノ目代等、貞應以後ノ新立ノ庄園ヲ沒倒シテ、在廳官人、檢非違使、健兒所等、過分ノ勢